

『吾輩は猫である』試論

上 田 正 行

この度、漱石の『吾輩は猫である』（以後『猫』と省略）を読み返して、新たに気づいた点を試論の形で述べてみたい。

漱石文学には、いわゆる原点と言われるものがいくつか有り、『猫』に於いてもそれが指摘される。『猫』が処女作であつてみればそれも当然の事であり、『猫』は言わば漱石文学の原点と言つべきものであり、ここから漱石文学の核^{コア}となるものをいくつか拾いあげてみて『猫』の世界、ひいては漱石文学の世界の解明に迫りたい。

一 子供の世界

まず子供の世界の描写から入りたい。『猫』を通読して特に異彩を放っていると思われるのが子供達の描写である。活き／＼としたその筆使いに驚嘆せざるを得ない。○とん子とすん子が砂糖を皿に盛る光景(二) ○泥棒騒ぎの後、とん子、すん子が母に質問する条(五) ○朝、騒々しく顔を洗うシーン(十) ○にぎやかな朝食風景(十) ○招魂社へお嫁に行く話(十)等、どれをとつても子供が活きている。一応『猫』では主人公の「吾輩」がこれら子供の仕種を見ながら

「人間は利己主義から割り出した公平といふ念は猫よりまさつて居るかも知れぬが、知恵は却つて猫より劣つて居る様だ」(二)とか、「世の中を見渡すと無能無才の小人程、いやにのさばり出て柄にもない官職に登りたがるものだが、あの性質は全く此の坊ば時代から萌芽して居るのである」(十)ともつともらしい教訓を垂れているわけで、その意味から言えば子供の世界は大人の世界の縮図、戯画にはなつてゐる。しかしそのためにのみ子供の世界が描かれているわけではなく、あえて言えばそれらの教訓的意図をはるかに超えて子供の世界は活きて輝いている。子供達のふりまく笑いは邪気がなく、技巧がなく自然である。適確に自由に子供を捉えている漱石の目は又愛情に充ちあふれている。親密の情と言つていいものがそこには流れていて、読んでいて快い情感に満たされる。『猫』全体のトーンとは違つて見える部分である。

なぜこれら子供の世界に注目するかと言えば、その世界が現実の間とかかなり異質な世界のように思えるからである。『猫』執筆時(明治三十七年末から三十九年半ばまで)に於ける漱石と子供達との現実

の時間は、『道草』にそっけなく描かれた世界であろう。健三は子供達に対して父親らしい愛情を示していない。

彼は子供が母に強請^{せび}って買って貰った草花の鉢などを、無意味に縁側から下へ蹴飛ばして見たりした。赤ちゃけた素焼の鉢が彼の思ひ通りにがら／＼と破るのさへ彼には多少の満足になった。けれども残酷^{むご}たらしく摧^{くだ}かれた其花と茎の憐れな姿を見るや否や、彼はすぐ又一種の果敢ない気分^{きぶん}に打ち勝たれた。何にも知らない我子の、嬉しがつてゐる美しい慰みを、無慈悲に破壊したのは、彼等の父であるといふ自覚は、猶更彼を悲しくした。彼は半自分の行為を悔いた。然し其子供の前にわが非を自白する事は敢てし得なかつた。

「己の責任ぢやない。必竟こんな気違^{きぢが}じみた真似を己にさせるものは誰だ。其奴が悪いんだ。」

彼の腹の底には何時でも斯ういふ弁解が潜んでゐた。（五十七）

こゝには家庭の不和の原因として妻の存在が大きく出て来るが、それに起因する帰朝後の家庭生活の惨状については鏡子夫人の回想に詳しい。狂気と思われる漱石が描かれ、子供達はその犠牲になっている。優しい父親は現れず、多くの場合漱石は怖い父親であつた。この事はかなり大きくなってからの記憶であろうが子供達の回想にも詳しい。伸六氏の父を見る目は冷く厳しい（注一）。いつも父親の目を気にしながらビク／＼していた子供に父親の愛情を感じずる事はかなり困難だつたに相違ない。総じて怖い漱石というイメージが強いが、実生活の上でこれほど子供達から恐れられた漱石が、作品の世界では（「道

草」を例外とする）なぜあれほど子供達を活々と愛情深く描けたのであろうか、というのが私の素朴な疑問である。この疑問は『猫』だけに止まらず『それから』『門』『彼岸過迄』においても指摘できる。

縫といふ娘は、何か云ふと、好くつてよ、知らないわと答へる。

そうして日に何遍となくリボン^{リボン}を掛け易へる。近頃はヴィオリンの稽古に行く。帰つて来ると、鋸の目立ての様な声を出して御凌^{ごりやう}ひをする。ただし人が見てゐると決して遣^やらない。室を締め切つて、きい／＼言はせる。だから、親は可なり上手だと思つてゐる。代助丈が時々そつと戸を明けるので、好くつてよ、知らないわと叱られる。（それから 三七）

近頃代助は元よりも誠太郎が好きになつた。外の人間と話してゐると、人間の皮と話す様で齒痒^はくつてならなかつた。（略）あの一図な所はよく、嫂の気性を受け継いでゐる。然し兄の子丈あつて、一図なうちに何処か通らない鷹揚な気象がある。誠太郎の相手をしてゐると、向ふの魂が遠慮なく此方へ流れ込んで来るから愉快である。實際代助は、昼夜の区別なく、武装を解いた事のない精神に包圍されるのが苦痛だつた。（それから 十一）

縫と誠太郎は代助の姪と甥であり、彼の「好いている」嫂の子である。二人共、代助にとっては好ましい存在であり、代助も「二人の子供に大変人望がある」（三三）。代助と子供の間^まに流れるものは『猫』の時間同様、親密な情である。この情を象徴する語として漱石の多用する

「よくってよ、知らないわ」があるが、これは漱石好みの言葉であり注意をうながしたい。この語にあるものは言われる側への信頼と甘えであり、漱石の願望であるように思える。

『門』では子供が重要な位置を占める。宗助夫婦には子供がいない。出来ないのだからその理由をお米は「人に対して済まない事をした覚えがある」だろうという易者の言で知り、自分なりに納得するが夫になか／＼うちあけない。この二人の一見、幸福ではあるが陰気で寂しい家庭に対して、子供が大勢いていつもにぎやかな坂井の家庭が対置される。宗助が坂井を訪れた時のシーンである。

宗助は座に着くや否や、隣の室で小さい夜具を干した人達の騒ぐ声を耳にした。下女が茶を運ぶために襖を開けると、襖の影から大きな眼が四つ程既に宗助を覗いてゐた。火鉢を持って出ると、其後から又違った顔が見えた。始めての所為か、襖の開閉の度に出る顔が悉く違つてゐて、子供の数が何人あるか分らない様に思はれた。漸く下女が退がりきりに退がると、今度は誰だか唐紙を一寸程細目に開けて、黒い光る眼丈を其間から出した。宗助も面白くなって、黙つて手招きをして見た。すると唐紙をびたりと閉めて、向ふ側で三四人が声を合して笑ひ出した。

やがて一人の女の子が、

「よう、御姉様又何時もの様に叔母さんごっこ為ませうよ」と言ひ出した。すると姉らしいのが、

「ええ、今日は西洋の叔母さんごっこよ。東作さんは御父さまだからパパで、雪子さんは御母さまだからママって言ふのよ。可くって」

『吾輩は猫である』試論（上田）

と説明した。其時又別の声で、「可笑しいわね。ママだつて」と言つて嬉しさに笑つたものがあった。

「私夫でも何時も御祖母さまのよ。御祖母さまの西洋の名がなくっちゃ不可ないわねえ。御祖母さまは何て言ふの」と聞いたものもあつた。

「御祖母さまは矢つ張りババで可いでせう」と姉が説明した。

夫から当分の間は、御免下さいましたの、何方から入らっしゃいましたのと、盛に挨拶の言葉が交換されてゐた。其間にはちりん／＼と言ふ電話の仮声も交つた。凡てが宗助には陽気で珍らしく聞えた。（門 九）

子供達の描写は未だ続くわけであるが、それにしてもこれは子供達の特徴を良く捉え、実に巧みとしか言いようのないものである。襖から覗く四つの眼、子供達の面白い言葉のやり取り、舌の回らない子供達の悠長な抗弁、どれ一つ取つても宗助の世界とは対極的な世界であり、宗助は限りないつかしきを感じてこれら子供の世界を見つめている。そこには光が溢れ、陽気な笑いが充滿している。崖下の家と崖上の家はあまりにも対照的である。宗助は又、坂井の話で「綺麗な支那製の花籃のなかへ炭団を一杯盛つて床の間に飾つたと云ふ滑稽と、主人の編上の靴のなかへ水を汲み込んで、金魚を放したと云ふ悪戯」が「大変耳新しかった」ことを記している。茶目っ気のある子供達であるが、それを耳新しいと記す宗助も茶目っ気の人であり、漱石の一面であろう。一言で言えば、子供達の「無邪気な世界」へのあこがれと言つて

いいものがここにはある。

『彼岸過迄』では「雨の降る日」で宵子の死が細かく叙述されているが、これは五女ひな子への供養であると漱石自身書簡で述べている（明45・3・21中村翁宛書簡参照）。又他のエッセイでもひな子についての愛情深い回想があり（注2）、漱石の子供への深い愛情を知る事が出来る。

『猫』の子供の描写から思わず話が発展したが、こう見て来ると漱石文学における子供達の占める位置はそう軽視できないように思える。単に子供達だけで片づけてしまえない、かなり重要な問題があるように思われる。

話を『猫』に戻せば、前述したように子供の世界はその教訓的意図を超えて、子供の自然さが尊重されている事に留意したい。又この自然さ、無邪気さに加えて「働きのない」という点が強調されている事にも注目したい。これは苦沙弥を形容して述べられた言葉であるが、「世の働きのある人」と対比されて使用されている点で、苦沙弥はこの場合、子供の世界の住人と見てよい。

今の世の働きのあるといふ人を拝見すると、嘘をついて人を釣る事と、先へ廻って馬の眼玉を抜く事と、虚勢を張って人をおどかす事と、鎌をかけて人を陥れる事より外に何も知らない様だ。中学杯の少年輩迄が見様見真似に、かうしなくては幅が利かないと心得違ひをして、本来なら赤面して然る可きのを得々と履行して未来の紳士だと思つて居る。是は働き手と言ふのではない。ごろつき手と言ふのである。吾輩も日本の猫だから多少の愛国心はある。こんな働

き手を見る度に撲つてやりたくなる。こんな者が一人でも殖えれば国家はそれ丈衰へる訳である。こんな生徒の居る学校は、学校の恥辱であつて、こんな人民の居る国家は国家の恥辱である。恥辱であるにも関らず、ごろ／＼世間にごろつて居るのは心得がたいと思ふ。日本の人間は猫程の気概もないと見える。情ない事だ。こんなごろつき手に比べると主人杯は遙かに上等な人間と言はなくてはならぬ。意気地のない所が上等なのである。無能な所が上等なのである。猪口才でない所が上等なのである。（十）

「働きのない」主人は又「意気地」なしであり「無能」でもあるが、「猪口才でない」。その点を猫から評価されている。猫はたえず距離をもって苦沙弥はじめ登場人物全てに辛辣な批評の目を以つて臨むが、時にはこのように主人に接近しその肩を持つシーンが出てくる。それは冷静、客観に努める作者（猫の目の視点）が、その距離を忘れる位、怒り心頭に達した時であり、この時、猫は本来の目を失い主人に接近する。批評性、客観性の喪失であるが、この事は逆に猫が主人苦沙弥と共に作者の分身である事を如実に語っている。作者に近くなつた猫が評価する世界は無力性の世界であるが、この特性こそ文明に毒されないで生きる人間らしさの象徴になつている点に留意したい。この世界の特性を具備しているのは「嘘をついて人を釣る」とか「虚勢を張つて人をおどかす」とか、「鎌をかけて人を陥れる」大人の世界の住人ではなく、子供達である事は言うまでもない。そして本来この子供の世界に住むべきはずの「中学杯の少年輩」が「見様見真似」に大人の世界になじもうとするのを見る時、主人の怒りは爆発する。例の落雲

館中学の連中の事を念頭に置いてゐるわけであるが、これら少年輩に向ける主人の怒りは尋常でなく特筆に値する。彼らは主人の理想とする子供の世界の「無邪気」「正直」「淡泊」から遠く離れて主人の痛棒を食らう。「有邪気」であり「生意気」であり「高慢ちき」であり、「ごまかし」「卑劣」「魂胆」を身につけてゐる。これらの性格、性分は主人の甚だしく忌み嫌うものであり、この事からも『猫』の世界は『坊っちゃん』同様、きわめて単純で通俗的な倫理（＝正義感）が支配していると言えるので、江藤淳のようにその「底の浅さ」を指摘する意見がないではない（注3）。たしかに底が浅いと言えれば言えるが私にはその単純な倫理を盾にして向きになり、血道をあげる主人の感情の激越さが面白い。

例えば主人は銭湯に出かけ生意気な書生を相手に喧嘩を始める。原因は単純で、「先刻から此両人は少年に似合はず、いやに高慢ちきな、利いた風の事ばかり並べて居たので、始終それを聞かされた主人は、全くこの点に立腹したものと見える」（七）とある。あるいは邪まな魂胆を持った落雲館中学生を生け捕りにしたり、金田鼻子の手先である下男、書生、車屋らの押掄にステッキを振りかざして苦沙弥は往來に飛び出る。カンシャクの爆発であり、我々はそれに拍手喝采を送る。その時我々は苦沙弥を変人とは認識してゐなく、きわめてまっとうな主人の稚氣を愛しているのである。激しい憤怒を隠さずに表現するその稚氣をである。もしこの激しい怒りを忘れ、隠しおこせる術を体得している者を常人とすれば、それを持続し隠しきれない苦沙弥は変人と言えるかもしれない。とすればこの稚氣と変人意識こそは苦沙弥を苦沙弥たらしめるものでなければならぬ。「大町桂月は主人をつら

『吾輩は猫である』試論（上田）

まへて未だ稚氣を免かれずと云ふて居る」（八）と桂月の評を逆手にとっているが、この稚氣こそ『猫』を『猫』たらしめるものであり、子供達の無邪気とも相通ずるものである。この稚氣ゆえに主人は迷亭、寒月、東風らの「太平の逸民」の中でも特異な存在を占めるのであり、十把一からげの「太平の逸民」ではない。苦沙弥の怒りの異常性とはこの稚氣の別名と言ってよい。こう見てくると『猫』の世界は従来言われてきた「太平の逸民」と「俗人」という二大世界の公式の外に、苦沙弥を一つの頂点とする「子供の世界」があるのではなからうか。それが象徴するものは正であり、無邪気であり、天真爛漫あるがままの生と言つていい。それはそのまま苦沙弥の潔癖と言えれば潔癖、少し俗で単純と言えれば単純なモラルにつながっている。この傾向は苦沙弥のみならず、この作の主人公たる吾輩にも共通するものである。

松脂と格闘しながら「吾輩は淡泊を愛する茶人的猫である。こんな、しつこい、毒悪な、ねち／＼した、執念深い奴は大嫌だ」（七）と述べているが、この性格はそのまま苦沙弥のものである。その苦沙弥が姪の雪江から「ちと正直に淡泊になさい」（十）と言われるのは少々皮肉だが、主人、吾輩のモットーはこの「正直」と「淡泊」という事に尽きる（注4）。

なぜこのように子供の世界にこだわつてきたかと言えれば前述したように作品の世界と現実とのあまりの落差である。『猫』の子供達は実に活き／＼としてゐるが、現実の子供達は必ずしもそのようではなかつたようである。尤も漱石には子供達と言われる一面があり、夫人もそれについて触れているが（注5）、病氣時に見せる顔も子供達はよく知っていたわけで、いつその顔が表われるか子供達は恐怖を抱きながら

父に対していたはずである。心の裡には暖かい愛情を抱きながら、実際には子供にとって全く不可解としか言いやうのない行動をとらざるを得なかった漱石の内には、たえず「こんな気遣ひみた真似を己にさせるもの」（『道草』）への激しい憎悪と怒りがあつた。狂気の源泉であり、子供達に恐怖を与えた病根である。彼がこれと和解するのは死の床であり、娘の泣くのをなだめた母の言葉に対して「いいよいよ、泣いてもいいよ」と言つたと言う（注6）。漱石の心の奥にはいつもこの暖かいやさしさが流れていたはずである。

こうみると『猫』をはじめとする子供の世界の描写は、いわばこの漱石の「やさしさ」の表現であり、現実に対して不幸な行動しか取りえなかつた漱石の希求の世界ではなからうか。十数編の英詩の中で充たされない愛をうたつた如く、これらの子供の世界に充たされない生、願望としての生をうたつたと言つていいのではないか。その意味で子供の世界は詩の世界と等価であり夢の世界である。この夢の世界から見れば現実の時間は「ごまかし」と「魂胆」と「技巧」と「小刀細工」で満ち／＼している。それらの時間を嫌悪し、苦沙弥や吾輩が子供の世界に接近するのは自然である。苦沙弥は稚氣あふれる子供なのである。世の常人は主人ほどカンシャクを起さず、やす／＼と現実と手を握る術を心得ている。

しかし、苦沙弥の悲劇はいつまでもこの世界にとどまり得ない事にある。子供の世界がいかに脆弱であり、瞬間においてしか幻想の時間は達成されないという事を苦沙弥は知りすぎている。子供の時間はあくまでも垣間見られた幻想の時間ではない。

主人は娘の教育に関して絶対的放任主義を執る積りとみえる。今に三人が海老茶式部か鼠式部かになって、三人とも申し合せた様に情夫をこしらへて出奔しても、矢張り自分の飯を食つて、自分の汁を飲んで澄まして見て居るだらう。（十）

子供はいつかは大人になる。そして同じ愚行をくり返すであらう、というこの認識は夢から覚めた現実のものである。

誠太郎は此春から中学校へ行出した。すると急に背丈が延びて来る様に思はれた。もう一二年すると声が変わる。それから先何んな経路を取つて、生長するか分らないが、到底人間として、生存する為には、人間から嫌はれると云ふ運命に到着するに違ひない。其時、彼は穏やかに人の目に着かない服装をして、乞食の如く、何物かを求めつつ人の市をうろついて歩くだらう。（それから 十一）

人はいつまでも子供の世界にとどまるわけにはいかない。いつかは暗い影を引きずりながら歩まねばならない運命を漱石は「子供の世界」の住人たちにも負わせているのである。

二 猫 の 恋

越智治雄は『猫』の世界には「金田たちの生きる日常的時間」と異なる「猫の時間」が存在し、「その世界では幻想が相対化されると同時に、金田に代表される世俗の論理も相対化され」と述べている（注7）。何を指して幻想と言うのか、又、「幻想が相対化される」か否

かについて私は意見を異にするが、『猫』の世界にはたしかに幻想の時間と呼べるものが存在するように思われる。その一つが子供の世界であり、今一つが三毛子との恋である。この二つは漱石の願望の世界として存在し、あくまでも相対化される事を拒否している。激しい憤怒や暗い狂気の世界の中でこの部分にのみ、やわらかい光が射し込んでいる。もっとも子供の世界がやがて大人の世界に変じ、三毛子の死を以て幻想の崩壊とすれば、二つの世界も又相対化を免れ難いが、事実は逆であって二つの世界の変化こそがその世界を相対化から救っているのであって、逆説的に言えば二つの世界を絶対化しているのである。

三毛子との恋は、恋というにはあまりにも短く、あつけないものであるが両者の間に流れる親密の情は見通し難い。太平の逸民共を茶化しているようでは、雑煮を喉につかえさせて猫じやを踊つてみたり、烏にバカにされたり、間拔けた滑稽を演じさせられてあまりいい役回とも言えない吾輩が（何の挨拶もしない烏に対してすぐ「此野郎、」とのぼせる所などは主人とよく似ていて面白い）、心を開いて話し合える相手はこの三毛子だけである。彼女は尊敬の念を以て吾輩に対し、この敬意の念が両者を結びつける大きな原因となっている。考えてみると『猫』の世界には吾輩の外に白君、三毛君、車屋の黒君等かなりの猫が登場するが、三毛を除いて彼らとの間にはあまり親密な会話はない。あまり品のよくない黒などは論外だが、吾輩の尊敬する筋向うの白君との間にもあまり積極的な会話は見られない。互いに飼主の人格を反映してか、夫々孤立しているように思える。とすると人間は元より、同族の猫からさえも吾輩はまっとうに評価されていない

『吾輩は猫である』試論（上田）

いと言う事になる。この事は終末の吾輩の最期に見られる、主人同様な孤独な相貌という点につながる。どこか飄々と生き寂しく死んで行く吾輩に我々は一抹の哀れを感じるのであるが、その吾輩に一時心を許し合える相手の存在した事は一つの救いである。

二人の間には楽しい会話が交され、特に吾輩への甘えた口調が注意される。全幅の信頼が寄せられている証拠である。帰り際に「私し帰るは、よくって？」と挨拶し、急いで戻って「あなた大変色が悪くってよ。どうかしやしなくって」（二）と心配顔に問いかけるあたり、大変なコケットリイである。「よくって」は何度も言うように漱石の愛用語で、相手に対する信頼と親愛の情のない限り使用されない言葉である（注8）。

残念ながらこの恋は恋らしい発展を遂げず、三毛子の突然の死によって終るが、吾輩の内にかなり深い痕跡を残す事になる。燈明をあげながら吾輩の事を「野良々々」と罵っている下女や師匠の声を聞き、「八万八千八百八十本の毛髪を一度に立て、身振ひをし」「その後二弦琴のお師匠さんの近所へは寄り付いた事がない」（二）という叙述は、吾輩の心中を理解しない者への愛想尽であり、三毛子との事を自己一個のものとして内面に封印した事を示す。このはかない三毛子との逢瀬は後に苦沙弥達が口にする女性論や結婚観、あるいは現実の苦沙弥の家庭生活と比較した場合、やはり際立っている。苦沙弥と妻君とのやりとり、寒月と金田富子とのロマンス……どれを取ってみても人間界のものには、吾輩と三毛子ほどの親密な情感、暖かさが流れていない。それは短いだけに瞬間、夢みられた幻想の時間と言っている。又、ここには漱石のきわめて素朴な愛の原型のある事を次に注意した

い。

漱石の原初的な愛の形は英詩をはじめとして、『夢十夜』や広田先生の夢に現われる女性等、さまざまあるが、それらの一つに私は『行人』に出てくる三沢の知り合いの娘の条をあげたい。離縁されて三沢の家に預けられた娘は三沢が外出する度に必ず玄關まで送り出て「早く帰って来て頂戴」と言う。三沢が「早く帰りますから大人しくして待つて居らっしゃいと返事をすれば合点」を^レする。三沢は家族の者に対してきまり悪かったがその娘を大変不憫に思う。やがて娘さんの精神に異常のある事が分るが、それが知れるまでさすがに三沢も家族の手前、叱ろうと度々試みる。

僕が怒らうと思つて振り向くと、其娘さんは玄關に膝を突いたなり恰も自分の孤独を訴へるやうに、其黒い眸を僕に向けた。僕は其度に娘さんから、斯うして生きてゐてもたった一人で淋しくつて堪らないから、何うぞ助けて下さいと袖に縫られるやうに感じた。

——其眼がだよ。其黒い大きな眸が僕にさう訴へるのだよ。(『友達』三十三)

ここにあるのは、寂しさを埋め合わせるために二人びったり肩を寄せ合つて生きようとする夢のような時間である。現実の時間から限りなく離れようとする詩的時間である。娘の精神異常でよりこの時間への憧憬が輝いて見える。このような生き方は現実を遮断して生きているように見える『門』の宗助、お米夫婦にも相通するものがある。罪ゆえに二人はびったり肩を寄せ合つて生きているのであるが、その二

人の生き方は谷崎潤一郎も言う如く「理想的な夫婦愛」の生活に近い様相を呈する。しかし、この理想の愛の形は現実の時間から限りなく遠くに位置している。三沢の場合同様、夢のような時間に属している。谷崎の言う如く現実にはありそうにない時間の世界での出来事である。又、『門』には天とか夢という言葉が多いが、天は二人の罪を見つめると共に、限りなく二人を誘う存在^{いざな}でもある。「夢の上に高い銀河が涼しく懸つた」(四)などという美しい叙述があるが、二人の世界はこの天にかかる銀河のように瞬間、美しく輝いてみえる。この天上の輝く時間は現実の罪との緊張関係から生まれるもので、ここに漱石の愛の宿命^{パドックス}という変らない悲劇的認識を感じる。とまれ、三沢と娘、宗助とお米の夫婦愛に漱石のやさしさとあこがれを見る事ができよう。

吾輩と三毛子の場合もこれら『行人』や『門』の世界とそれほど隔たつてゐるものではなく、漱石の素朴な愛の原型を示していると見てよい。夢や詩の世界を通してしか女性との親密な情を語りえなかつた漱石の変らぬ一面である(注9)。

これら幻想の時間に対して、苦沙弥と妻君の家庭生活、太平の逸民らの述べる恋愛観、結婚観、終りの結婚不可能説、夫婦別居の説に至つてはまぎれもない現実の時間であり、この両者はきわ立つたコントラストをなしている。それにしても現実の時間に向けられる漱石の憤怒、憎悪の激しきは特筆に値する。その戯画化された恋愛観、結婚観は、はじめのうちこそ笑いを誘うが、次第にサディステックと思われ程、異様な情熱をもつて結婚不可能説、夫婦別居説が語られる段に至つては最早、笑いはない。ものに憑かれた様に、異様に光り輝く漱石の目が思はず髣髴とするようである。この部分の女性論、恋愛論を

読んで不快感を味わない女性読者は少いであろう。それほど『猫』における漱石の女性嫌悪の情は激しい。これは実際の家庭生活の裏返しでもあろうが、その家庭の現実には『道草』で描かれた通りである。従って、『道草』の家庭の現実と、『猫』の現実憎悪の情は相関々係にあり、両者は陰画と陽画の違いだけでモチーフは変らない。

今、その例を少し拾ってみれば、『猫』ではよく「女なんか何かわかるものか、黙って居ろ」という主人の剣突くに対して、「どうせ女ですわ」(二二)と妻君が開き直る条がしばしばあるが、これはそのまま『道草』の健三、御任の描写に対応している。健三は「すぐ頭の方で彼女を抑へつけたがる男」であり、「事々について」「権柄づく」な態度を取り妻君を不快がらせる。健三はたえず「己の責任ぢやない。必竟こんな気違じみた真似を己にさせるものは誰だ。其奴が悪いんだ」(五十七)と言ひ言ひ訳けを用意しているが(これが健三の狂気の根である事に变りはない)、それにしても健三の女性観はかなり古い。

「あらゆる意味から見て、妻は夫に従属すべきものだ」

二人が衝突する大根は此所にあつた。

夫と独立した自己の存在を主張しやうとする妻君を見ると健三はすぐ不快を感じた。動々もすると、「女の癖に」といふ氣になつた。それが一段劇しくなると忽ち「何を生意氣な」といふ言葉に変化した。妻君の腹には「いくら女だつて」といふ挨拶が何時でも貯へてあつた。

「いくら女だつて、さう踏み付にされて堪るものか」

健三は時として細君の顔に出る是丈の表情を明かに読んだ。

『吾輩は猫である』試論(上田)

「女だから馬鹿にするのではない。馬鹿だから馬鹿にするのだ、尊敬されたければ尊敬される丈の人格を拵へるが、」

健三の論理は何時の間にか、細君が彼に向つて投げける論理と同じものになつてしまつた。(七十一)

『猫』には爆発する陽性のカンシャクがあり、『道草』には内向する陰性の狂気がある。互いに触れ合わない二つの人格は、互いをヒステリー、狂気の病源として自己の病を肥大させて行く。二人の間には互いを敬愛する念が皆無である。「単に夫といふ名前が付いてゐるからと云ふ丈の意味で、其人を尊敬しなくてはならないと強ひられても自分には出来ない。もし尊敬を受けたければ、受けられる丈の實質を有つた人間になつて自分の前に出て来るが好い」(七十一)と言ひ言ひ抗弁を妻が用意すれば、「尊敬されたければ尊敬される丈の人格を拵へるが好い」と言ひ言ひ同じ論理で夫は對抗し、「彼等は斯くして円い輪の上をぐるぐる廻つて歩く」以外にない。憂鬱きわまりないこれらの時間は彼らの病氣をしばしば亢進させ、ただ堪えるという美德を生活の知恵として彼らに授けるだけである。互いが互いの病氣と不愉快の原因でありながら「二人は互に徹底する迄話し合ふ事のつひに出来ない男女」(二十一)であつた。この陰気で憂鬱きわまりない現実の時間は、『猫』では初めは陽氣に、次第にグロテスクに語られ、終りには激しい憤怒と憎悪の爆発となつて語られる。

グロテスクな恋愛譚は迷亭の蝸壺峠の蛇飯の話に止めを刺すが愉快と言えない。話し終つて「結婚なんかは、いざと云ふ間際になつて、飛んだ所に傷口が隠れて居るのを見出す事がある」(六六)と警句を発

『吾輩は猫である』試論(上田)

するが、なか／＼苦味を含んでいる。ついでに立町老梅の失恋譚を語り「考へると女は罪な者だよ」と慨嘆する。主人は受けて「羽よりも軽いものは塵である。塵よりも軽いものは風である。風よりも軽い者は女である。女より軽いものは無である」とローマの詩人を引用して気炎をあげる。迷亭も調子づいて「女の子を唐茄子の様に籠へ入れて天秤棒で担いで売歩い」ていた話をするが、この話も刺があり愉快とは言いがたい(金10)。以下、目につく女性論を拾って行くと「女と云ふものは始末におへない物件だからなあ」(十一)「女は全然不必要な者だ」(同)「妻は友情の敵でなくて何であるか」(同、原文ラテン語)「妻を持って、女はいいものだ杯と思ふと飛んだ間違になる」(十一)などであるが、これは全て主人の言であるところに特長があり、まじめとしてギリシャのソクラテス以来の哲人の女性論をあげているが、どれも辛辣であり主人の執拗さに驚く外ない。この女性論、家庭論の行きつく果は親子別居、夫婦別居であり結婚不可能説である。自我拡張のたどりつく二十世紀文明の終末であるが、それへの激しい呪詛のある事は言うまでもない。この辛辣なシニシズムに至って、もはや笑いばどこにもない。あふれるばかりの現実への憎悪と嫌悪の情がある。救い難い現実への怨嗟としか言いようがない。主人はニーチェの超人の哲学を評して、「あれを読むと壮快と云ふより寧ろ気の毒になる。あの声は勇猛精進の声ぢやない、どうしても怨恨痛憤の音だ」(十一)と述べているが、この評言はそのまま『猫』の世界にあてはまる。

三 金の論理

『猫』の終末近くに「とにかく此勢で文明が進んで行った日にや僕は生きてるのはいやだ」(十一)と苦沙弥が慨嘆する所があるが、この表現を待つまでもなく『猫』の中心が現代文明への激しい呪詛、というより、ほとんどその全的否定にある事は明白である。なまじ文明批判などというような生やさしいものではない。苦沙弥の呪詛は物質文明とそれを代表する俗物に向けられる。主なる人物、事件として金田鼻子夫人が君臨し、落雲館事件がこれに付随する。夫人に向けられる主人の憎悪は尋常ではない。夫人のみならず、金田某、見も知らぬ富子嬢にまでその怒りは向けられ、主人の逆上のただ事でないのを示している。坊主憎けりや——であるが、金田鼻子のどこがそんなに憎いのか。

夫人は実業家金田の妻君で金満家、勢力家の部類に属し、たえず金のある事を鼻にかける。金田鼻子はもちろんそのパロディであり、金田富子も同様である。明治物質文明を代表する俗物であり誇り高い苦沙弥の歯牙にもかけたくない手合である。この部類には他に鈴木の高藤さん、多々良三平君などがある。時流に無批判に乗っかって生きるこれら御都合主義者達を極楽主義と皮肉って、その軽薄さを笑っている。苦沙弥の怒りは精神をも領略、侵犯しようとする物質文明の横暴さに向けられる。

なぜ金があるというだけで大きな顔をしなければならぬのか。又そういう人間が幅を利かすか。「金田某は何だいな紙幣に眼鼻をつけた丈の人間ぢやないか、奇警なる語を以て形容するならば彼は一個の活動紙幣に過ぎないのである」(四)。たしかにその通りなのである。しかし、いくら「活動紙幣」と蔑んでみても、「働きのない」事が上等な

んだと力んでみても、金が実際に幅を利かし、それが精神をまで領略するのを目にする時、苦沙弥は言いようのない無力感に襲われたはずである。そしてそのどうしようもない苛立ちが金田夫人への感情的反発となって表われるのである。異常とも思える反発は裏返せば苦沙弥の無力さの象徴である。しかし、感情的反発だけでは問題は解決しない。金、物質の魔力に対して苦沙弥はいかに対決し、精神の孤塁を護ろうとするのか。

一見、金を蔑んでいるかに見える苦沙弥であるが、彼が金をいかに認識し、蔑むに至ったかを考えると面白い問題が出てくる。元来、彼は金に対して恬淡としていると云い難い人物である。本文にも「主人の様な超然主義の人でも金銭の観念は普通の人間と異なる所はない。吾困窮する丈に人一倍金が欲しいのかも知れない」(五)とあり、又「太平の逸民」然とした顔をしているが「娑婆氣」も「欲氣」も充分あり、いつ「彼らが平常罵倒している俗骨どもと一つ穴の動物になる」(二)か分らない危険性のある事を、猫の目によって鋭く捉えられている。俗氣充分の苦沙弥の金に対する反発の仕方は大変面白い。

僕は実業家は学校時代から大嫌だ。金さへ取れば何でもする、素町人だから昔で云へば(四)

ここには今の金持はかつての素町人——たゞの町人であり、無倫理、無節操の上もない輩だという蔑みの氣持がある。この「素町人」と言う言い方に苦沙弥の古い儒教倫理(「金」はいやしいという考え方。本文に「高利貸ほど下等な職はない」(四)という表現も見える)が

うかがえるが、この町人を見下す目は儒教倫理で固まった武士のものである。又、言うまでもなくこれは漱石自身の目でもある。こう見ると、苦沙弥の異常とも思える成金への蔑みと反発に、勃興しつゝある新興町人と没落しつゝある武士階級(士族)の末裔という二大勢力の交替を指摘する事も誤りではない。この事を証左するものとして英国留学時の「断片」がある。

(一)金の有力なるを知りし事

(二)金の有力なるを知ると同時に金あるものが勢力を得し事

(三)金あるものゝ多数は無学無智野鄙なる事

(四)無学不徳義にても金あれば世に勢力を有するに至る事を事実に表示したる故国民は窮屈なる徳義を棄て只金をとりて威張らんとするに至りし事

(五)自由主義は秩序を壊乱せる事

(六)其結果愚なるもの無教育なるもの齡するに足らざるものをも士大夫の社会に入れたる事

(七)昔時は金の力を以て社会的の地位は高まらざりし事御用達は一個の賤業にして金ある為め尊敬は受けざりし事

(明治三十四年四月頃)

明治社会が急速に近代化をたどる過程で、この期は自由主義経済が旧秩序を破壊し社会を大きな混乱にまき込もうとする激動期であろうが、これは旧秩序の崩壊を目のあたりにした旧秩序護持者のほげしい怨嗟の声である事は一目して瞭然である。かつての「士丈夫の社会」

『吾輩は猫である』試論(上田)

「徳義」「秩序」に対して、「自由主義」「無学不徳義」「御用達」賤業「勢力」が対応し、これらが旧秩序に取って換わっている。漱石の批判が自己の地位と自己の属する社会、階層の秩序を脅かそうとする新興商業資本に向けられている事は明らかである。「無学無智野郎」などと言う多分にヒステリックな表現は、没落する漱石の階層と社会秩序がいかなるものであるかを如実に語っている。

漱石は英国で書き記したこの感想をそのまま『猫』の世界に持ち込んでいる。金田鼻子への怒りは「秩序を壊乱せる」者への怒りであり、「無学無智野郎」なる者が「勢力」を有する事への怒りである(注11)。したがって苦沙弥の怒りは、現状を慨嘆しながらそれを如何ともし難い無力な旧秩序の側からの道義的、感情的反発であると言う事ができる。前述したように、この無力と苛立ちが『猫』の異常とも思える怒りとなっている。

では旧秩序は何もなすところなく、ただ世を慨嘆し、無知蒙昧の輩を軽蔑し傍観しておれば良いのか。漱石は新しい時代の主人公である「金」に対して鋭いメスを入れ、人間の精神をも支配するこの怪物に執拗に食い下り、金の論理に対抗する論理を樹ち立てようとする。

金に直接ふれた作品、エッセイとしては「金」(『永日小品』)「私の個人主義」「現代日本の開化」『硝子戸の中(十五)』等かなりあるが、漱石がそこで指摘しているのは「金の一見公平に見える不公平」(注12)という性格である。私流に言い直せば、現代資本主義社会における金の最大矛盾である「労働力」と「価値」の不均衡さの指摘という事になろう。つまり漱石は近代資本主義社会のとば口に立って、労働力が正当な価値を受けていない矛盾を指摘しているのであり、余剰価値を

あげ利潤を追求して行く資本の矛盾に鋭く迫っていると言える。漱石はマルクスの指摘した資本の有する最大の矛盾に迫りえた数少ない日本の作家の一人であるというのが、私の率直な意見である。社会科学的方法ではなく、あくまで実感から入って行ったところに漱石の卓抜さがあると言える。この資本主義社会の労働力と価値の矛盾故に労働を拒否しているのが『それから』の代助である。作中、彼は「働かない者の論理」を展開しているが、これは傾聴に値するものを持っている。

○何故働かないって、そりゃ僕が悪いんじゃない。つまり世の中が悪いのだ。もっと大袈裟に云ふと、日本対西洋の関係が駄目だから働かないのだ。

○働くのも可いが、働くなら、生活以上の働きでなくっちゃ名譽にならない。あらゆる神聖な労働は、みんな麵麩を離れてる。

○生活の為めの労働は、労働の為めの労働でない。

○食ふ為めの職業は、誠実にや出来悪い。

○労働の内容も方向も乃至順序も悉く他から制肘される以上は、其

労働は墮落の労働だ。(全て「六」)

代助の働かない根拠の大前提に「日本対西洋の関係が駄目」であるという認識がある。日本が西洋の追随を止め内発的に開化して行くでなければ意味がないという考え方は、漱石の初期文明批評の変らぬ視点であり「現代日本の開化」で詳述される通りである。従って、代助が働かないという事は明治文明への痛烈な批判になっているわけ

であるが、その上に面白いのは彼の労働観である。これ又、現実の労働観への挑戦である。代助は労働力が金に換算されるのを拒否している。資本の論理（金の論理）の拒否である。そして「労力の為めの労力」という純粹労働のような観念を持ち出している。いみじくもそれを「神聖な労力」と名づけ、金になる労力を「墮落の労力」と決めつけている。代助に言わせれば、本当の労働は金を度外視してやらなければ誠実に出来ないと言う（注13）。これは労働を神聖視した、いわば古典的な労働観であって、近代資本主義社会のそれではない。この潔癖な労働観の中にも我々は漱石の儒教モラル的なものの根強さをうかがう事が出来る（注14）。この代助の考え出した純粹労働の論理は労働力と価値の矛盾への鋭い批判となっていて、その点は評価してよい。しかし、残念ながら矛盾に対抗できる論理であるとは言いがたい。自説を展開した代助が平岡に「さうすると、君の様な身分のものでなくっちゃ、神聖の労力は出来ない訳だ。ぢや益々遣る義務がある」（六）と反問されて答えに窮するのは当然である。矛盾の指摘にはなるが矛盾を超える論理とはならない。所詮、観念の世界の所産であり資本主義社会以前の論理である。

金の論理に対して有効な論理を樹立できなかった漱石は、その憤懣をひたすら持てる者によつて行く。『野分』などは特にそれが顕著である。終りの白井道也の講演はそのまま漱石の考えとみてよい。道也はそこで世の金持を激しく攻撃し、金をためる事と学問の世界の全く別である事を繰り返し強調する。「金がほしければ金を目的にする実業家とか商売人になるがいい。学者と町人とは丸で別途の人間であって、学者が金を予期して学問をするのは、町人が学問を目的にして

丁稚に住み込む様なものである」（十一）と言った具合である。しかし、道也は金儲けを否定していない。たゞ金持が自己の領域以外に口を出すのを激しく非難する。趣味とか嗜好とか人生、社会の事に關しては学者に頭を下げよと言っている。はたして明治知識人にそれほど見識や指導性があつたかどうか分らないが、漱石の見識を語っているのは確かである。ここには物質界が精神界を領略し、趣味（注15）の低下を招き、ひいては日本文明の崩壊につながるという漱石の危機意識が充分にうかがえる。ために、それを訴えるのに急で論理が少々荒っぽく、教訓臭い。漱石の初期文明批評が啓蒙性を免れない所以である。それはそれとして、ここで指摘したいのは漱石は精神界と物質界を完全に二分したと言う事である。精神界は精神界、物質界は物質界であって、相互に独立不干渉であるという、いわば二元化論である。商人や金持は金を勘定しておれば良いのであって、趣味や文化など高尚な事に口を出すなという切り捨てと蔑視の論理である。裏返せば精神界の住人のエリート意識である。没落する階級が唯一の優位性の保証をそこに求めようとするあがきと取れなくもない。社会科学に言えば下部構造の矛盾を鋭く認識しながら、それが上部構造に如何に反映し、意識が変化して行くかという認識にはついに至らなかった。逆に下部構造の変化とそれが上部構造に及ぼす影響に警戒的であった漱石は、下部構造の論理を黙殺し精神界に立てこもった。歴史の变化という考え方に彼は冷淡だった。その後の彼は自己の出自の階級の安息できる精神界のみ対象とした。物質界は切り捨てられ、作品のすみに押しやられる。彼の文学世界は精神において深化は見られるが、物質を軽視することでその世界を狭くして行く。

結論を言えば新しい時代の金の論理に対して、それを超える歴史的、社会的認識を見出せず、没落して行くものの唯一の優位性を守るべく精神の孤塁にしがみついて行くのである。

四 独仙の世界

最後に、太平の逸民達の代表する精神の世界は、よく明治物質文明に対抗し、その批判たりえているのかという事が問題になる。が、残念ながら答えは否定的である。なるほど太平の逸民と言うだけあって彼らの展開する話は奇想天外、空想の翼に乗ってとどまる所を知らないが（もともと『猫』本来の面白さはそれらの愚にもつかないたわ言、罪のないお喋りにある事は確かだが）、こと文明への危機意識、物質文明批判となるとどこまで本気なのか、苦沙弥を除いてはかなり疑わしい。事実、文明病である胃病や神経衰弱に罹っているのは苦沙弥のみで、他の連中は観念性や軽薄さや無定見を最後に手厳しく批判されている。その場合も苦沙弥は批判の対象から免れている。

呑気と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がある。悟った様でも独仙君の足は矢張り地面の外は踏まぬ。気楽かも知れないが迷亭君の世の中は絵にかいた世の中ではない。寒月君は珠磨りをやめてとうとう御国から奥さんを連れて来た。（略）東風君も今十年したら、無暗に新体詩を捧げる事の非を悟るだらう。三平君に至っては水に住む人か、山に住む人かちと鑑定が六づかし。（略）鈴木藤さんはどこ迄も転がって行く。（十一）

ここで登場人物はあらゆる衣装を剥ぎ取られ、たゞの人として各々その地を頭にする。滑稽の世界の終焉であり、人々は生真面目な顔をして歩みはじめる。ここから漱石文学の真の出発が始まるわけで、『猫』はその意味で問題の解決は何一つなされていないと言っているかも知れない。従って、『猫』の世界の精神界を云々する事自体、すでに問題と言わねばならない。なぜならば漱石文学で重要な位置を占める精神の問題が、ここでは滑稽小説というスタイルで論ぜられ、論じている当人達が先に上げた如く猫から手厳しい批判を加えられているからである。では全く論ずるに足りないのかと言えば必ずしもそうでない。ここに『猫』の精神界の問題を論議する時の難しさがあると思われるが、この点に充分留意して、ここでは物質文明に対抗して出されている独仙に代表される東洋的消極主義について考えてみたい。独仙の主張はつまるところ精神修養論である。

西洋の文明は積極的、進取的かも知れないがつまり不満足で一生をくらす人の作った文明さ。日本の文明は自分以外の状態を変化させて満足を求めるのぢやない。西洋と大に違ふ所は、根本的に周囲の境遇は動かすべからざるものと云ふ一大仮定の下に発達して居るのさ。（八）

ここにすでに独仙的世界の特質と限界は明かである。「根本的に周囲の境遇は動かすべからざるもの」とする仮定は二元化論の必然の帰結である。精神は精神であり、物質は物質であるとする二元論から物質は動かすべからざるものとする仮定は当然出てくる。とすれば、物

質が原因で起こる不満足や不安を解消するには精神の修養以外にない。心を自由にする修業のため、禪家や儒家の言が賞揚される。主なものを拾い上げれば「電光影裏に春風を斬る」「心を置きざりにする」「見性成仏」「自然天然」「悠々」「従容」「三更月下無我に入る」「応無所住而生其心」等々である。これだけを取りあげればこれはかなり漱石好みの言葉であり、意味深い内容をも持つ事が分るが、独仙自体「春風影裏に電光を斬る」と誤用したりしている事からも、やはり相対的な意味をしか持ちえず、あくまでも安心を得るための精神修養論の域を出ないと見るべきである。この同じ延長線上に「おのれを忘れる」ための素朴な人間論がある。

イ、己を知るのは生涯の大事である。(十)

ロ、凡て人間の研究と言ふものは自己を研究するのである。(九)

ハ、自分で自分の馬鹿を承知して居る程尊とく(注16) 見える事はな
い。(九)

ニ、主人は鏡を見て己の愚を悟る程の賢者ではあるまい。(九)

肥大した自我の呪縛から逃れるためにまず愚者たることを自覚せよと言っているので、認識の変革なくして精神の変革はないとするこの考え方は、先の修養論の前に位置すべきものかも知れない。又これが吾輩の認識である点、軽視できないものを持つている。これと関連して独仙が「バカ竹」の話をするが、結果として愚者たる事を自覚している「バカ竹」が、最も「天然自然」に近い存在となっている。

この独仙に代表される東洋的消極主義をどう考えたら良いのか。従

『吾輩は猫である』試論(上田)

来の岡崎義恵の「則天去私への出発点と見られる可能性」という積極的評価に対して、「日本近代文学大系24」(角川 松村達雄、斎藤恵子 注釈)は補注で適切な批判を行っている。それによると「独仙の消極哲学は多分に通俗的禪坊主の説教のにおいがする。作者はやがて迷亭の口を通して独仙の正体を暴露する(九)。かくして独仙が諷刺の対象となつてはいるだけでなく。独仙の消極哲学に他愛もなく感動する苦沙弥もまた諷刺されている。漱石には禅的な悟達への憧憬が生涯根強く持続しているが、容易に禅に全身的に自己を投入できなかったのも、独仙のような生ま悟りの危険を知っていたからでもある」と述べ、「独仙のもっともらしい消極哲学の喜劇性」を指摘している。全体としてこの批判は適切であつて私もこの説に与したのであるが、問題がないわけではない。作品の性格から言つて、独仙の世界だけ高い価値を有するとは初めから考えられない。注釈者の言を待つまでもなく彼らは全て諷刺の対象とされ、又、終りの部分で適確に猫により批判されておき、この事は動し難い。しかし、だからと言つて独仙の世界が完全に否定されていると言えば、必ずしもそうと言えない。ここに『猫』の複雑さもあり、問題もあるように思われる。たとえば独仙の門下に理野陶然、立町老梅などというキ印がいる。これらをめぐつて苦沙弥は狂人論を展開しているが、それによると「癲癲院に幽閉されて居る者は普通の人で、院外にあれば居る者は却つて気狂である」(九)という結論に達している(注17)。我々の狂人と考え、常人と考えているものの位置の逆転であるが、『猫』には多くの価値の逆転がある。『猫』はあらゆる物を諷刺の対象にしながら我々の常識と言うものに挑戦している。ここに『猫』の尽きない面白さがあるので、我々

の常識で考えて、正、善、悪なるものが必ずしも『猫』の世界ではそうはなっていない。又、『猫』ではあらゆるものが相対化され、絶対と言えるものがない故、全てが全肯定されていないように、全てが全否定されているわけでもない。いわば作者自身が判断中止したような所があり、どのようにでも解釈できる曖昧さを残す部分が多くある。

八木独仙の部分はそれであって、彼が相対的世界に住し完全主義者でないところがかえって面白い。又、彼の世界が漱石のそれとある共通性を持っている事も否定できない。先にあげた禅的語録の世界はやがて『思ひ出す事など』に受け継がれて行く要素を持っている。もっとも一方の澄んだ心境に対して『猫』の方はあまりにも「説教」臭いかも知れない。しかし、説教臭は漱石の初期作品に共通するものであまり非難するにあたらぬ。又、『門』で宗助が参禅するのは「心の実質を太く」するためであった事も注意したい。頭で出来上った観念を実践して身につける事であったので、独仙的世界の実行とも受け取られる。そして何より問題にしなれないのは、独仙の思考の根本は漱石のそれと大むね変らないという事であろう。漱石の二元論的思考はそのまま独仙の世界に持ち込まれていて、その結果、物質文明に対抗できるだけの論理を展開していない事である。

独仙的世界を諷刺の対象にしなればなかったのは、賢明な漱石が二元論的思考より出発し、何の対抗的論理も組み立てられない不明を悟ったからである。独仙の世界は実に無力である。これが真面目な形で提出されれば、それはそのまま漱石の敗北を意味する。漱石は独仙をつき離して、新たに精神の世界を開示しようとするが、後味の悪い曖昧さは残る。物質界に対抗しうるものを何一つ提示しなくて『猫』

の世界は終るが、これは作者の予期に反するはずである。物質界に対する精神界の優位性を立証するため展開された独仙の世界であったが、それを諷刺の対象にし了せる事で漱石は自己の矛盾を強く意識したはずである。独仙的世界の描出の曖昧さはそのまま漱石の自己矛盾と曖昧さを語っている。

独仙的世界は結局のところ精神修養論と「バカになれ」という、単純な結論でさびしく終息する。苦沙弥の呪詛した強烈な物質の世界に対して何ともひ弱ではかない世界の対峙であった。これでは苦沙弥の「ぼくは生きてるのはいやだ」という厭世主義はますます深まるばかりであり、絶望はいや増すばかりである。苦沙弥は最後に「自殺クラブ」を考え出すが、ここには救いのない人間の未来に対する絶望があるばかりである。この絶望と精神の無力性の中にあつて狂気に陥らない人間の方が異常である。苦沙弥には追跡狂やその他のパラノイアックな面があり、従来、精神病理学的方面から考えられたが、これはきわめて正常な反応であつて苦沙弥の不可解な行為は全て絶望がさまざまな形で面に現われた結果である。物質の激しい攻勢に絶望し、精神の世界で新しい方向を見出しえない誠実な人間の苦悩とも言える。

『猫』には二つの怒りの表現がある。一つは金田鼻子に対するように、正の怒りの情念の爆発であり、今一つは対象が自己の内部に向けられ、内にとぐろを巻く類いの負の情念の怒りである。これは徹底すると自己嫌悪より自己破壊に至り狂気に行きつく。苦沙弥の偏執狂的世界はまさにこれであり、『猫』では苦沙弥のみが有するものである。苦沙弥のいわゆる狂気の世界は全て文明の絶望と自己の無力から発しているもので、この前提をぬきにした精神病理学的考察は全く無意味

に等しい。後に漱石は「現代日本の開化」で現代日本に住する者は心に不安と空虚を有しているはずだと述べたが、この不安と空虚に最も誠実であったのが苦沙弥である。苦沙弥こそ明治物質文明を最も誠実に生きた男である。そしてこの不安と空虚からの回復、いかに精神の世界において安心を得るかがその後の漱石文学の最大のテーマであってみれば、独仙程度の人間から回答を得ること自体、軽率であると言わねばならない。独仙の世界を相対化し、簡単に答を出さなかったところに作家漱石の誠実もあつたと言っている。

「呑気に見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする」——陽気の皮を剥げば全て皆、寂しい存在である。羽目を外して笑っていても、いつか笑えない時が来る。所詮、『猫』も面白うてやがて寂しき世界なのである。平常の我に返って、回りを見渡してみれば、ひっきりよう孤独な人間群像があるばかりである。その時「お前は必竟何をしに世の中に生れて来たのだ」（『道草九十七』）というあの声が聞こえてくる。猫の最期のように「太平を得る」眠りはまだ〜人間には訪れてこない。

(注)

- 1 夏目伸六『父・夏目漱石』（昭31・12文芸春秋社刊）によれば、伸六氏は冒頭で父親への愛情の皆無であり、かつ、そうであった事を述べている。
- 2 ひな子をなくして知り合いの皆は又、子供を生めば良いではないかと慰めてくれるが、死んだ児への愛情はそれとは別で、なくしたものは二度と返ってこないという深い喪失感を述べたエッセイがあつたと記憶するが、題名が出てこない。
- 3 江藤淳『夏目漱石』（昭31・11 東京ライフ社刊）

『吾輩は猫である』試論（上田）

- 4 落書館事件で相手の教師の申し開きに対して「いや、さう事が分かればよろしいのです」（八）と答えるあたり、「正直」「淡泊」の見本というより、少々お人好しすぎるくらいもある。この条件を呑んでも受ける迷惑は一向に減退しないのである。
- 5 「一体頭さへ悪くない時は、ずぶんの子煩悩で、子供たちが何をしようとして、ここに笑って見てゐるか、自分も相手になって遊ぶか、でなければわれるやうな騒動の中に坐って、すまして一向気にかからないうまく本をよんだりしてゐたものでした」（『漱石の思ひ出』角川文庫本による）
- 6 同右
- 7 越智治雄『漱石私論』（昭46・6 角川刊）
- 8 細君の妹が「あらいやだ。よくってよ。知らないわ」（十）と言っている個所があるが、この場合は例外に属する。
- 9 岡崎義恵『漱石と微笑』（昭和22・3生活社刊）で、氏も「三毛子との恋」を取りあげているが、概ね氏と同じ観点に立つ。
- 10 漱石は生後まもなく四谷の古道具屋（源兵衛村の八百屋とも）に里子に出され、毎晩、大通りの夜店の籠に入れられたまま放置されていたという（角川『日本近代文学大系・24』年譜）。この体験が反映しているかも知れない。とすれば、幼年期体験のカリカチュアととれる。
- 11 「『惴り様、女ですよ。野郎は御門違ひです』と鼻子の言葉使ひは益々御里をあらはして来る」（三）という個所があり、又電話で話をしてゐる富子の言葉使いをわざと乱暴に描写している（三）。共に「無学無智野郎」なることの強調であらう。
- 12 中村光夫「金銭と精神」（昭49・9「展望」）。この論考より示唆されるところ大であった。
- 13 『硝子戸の中』（十五）で講演料を出さうという相手に対して、「労力を売りに行ったのではない。好意づくで依頼に応じたのだから、向ふでも好意丈で私に酬いたらよからうと思ふ」と答えて受け取らうとした

『吾輩は猫である』試論（上田）

- い。
- 14 明治三十四年二月十二日（火）の日記に、「Craig ニ至ル文章ヲ添刪セン」ヲ依頼ス extra charge ヲ望ム卑シキ奴ナリ」とあるが、これは近代社会の「契約」という觀念に疎かった事を示すが、それ以上に漱石の古いモラルが感ぜられる。
- 15 中村光夫氏は前掲論文でこの「趣味」という言葉は意味が広く、強い言葉で、倫理も美学も含み「人間が立派に高貴に生きる」といふことは、その人間の趣味の実現である」といふ意に解釈されている。
- 16 この「尊い」という語は「あはれ」と並んで初期作品に頻出する語で、これも美と倫理を兼ね具えた言葉である。
- 17 この事を実生活においても漱石が考えていた事は夫人の回想でも明らかである。夫人によれば明治三十六年の暮あたりから翌年にかけてであろうか、漱石は半紙に墨で次のような文句を書いて机上に載せていたという。「予の周囲のもの悉く皆狂人なり。それがため予もまた狂人の真似をせざるべからず。故に周囲の狂人の全快をまって、予も佯狂をやめるもおそからず」（『漱石の思ひ出』）。

（島根大学教育学部国語研究室）